南の国のナデシコ税理士 成功へのキセキ

第32回 義父との別れ

今年の桜を見ることなく、義父が逝きました。
93歳の大往生でした。

考えてみると、24歳でお嫁に来てから、実の父親より長く、一緒に過ごした人です。

７人家族の長男の、さらにまた長男の家に嫁いだころ、義父はとにかく「怖い」人でした。７人家族というのは、夫と義父、姉と妹、そしておじいちゃんとおばあちゃんです。義母は早くに亡くなっていたので、私が嫁ぐまで義姉が一家の家事一切を任されていました。結婚後は、それを私がすべて引き受けることになったのです。

３世帯なので、当然、生活の時間帯も違います。朝食は２回、夕食も２回に分けて用意するという生活です。当時義父は、内装工事の会社を経営していて、１階が会社、２階が自宅という生活をしていたため、毎日の昼食の用意も私の仕事です。

つらかったのは、友人と買い物に行っても、テニスに誘われても、必ず12時までに戻って、食事の支度をしなければならないことでした。夕食の時間も午後７時と決まっていたので、午後に外出し、友人と楽しい時間を過ごしていても、あわてて戻って、食事の支度をしなければなりません。その頃の私にとって、朝から夜まで、外でのんびりするなんて、夢のまた夢だったのです。

そのうえ、掃除も洗濯も料理も苦手だった私は、毎日、怒られてばかりいました。とくに掃除は苦手…。広い家を午前中いっぱいかけて、拭き掃除をするのですが、なぜかきれいにならず（汗）、毎日雑巾をもって、走り回っていた記憶があります。

長男の家ですから、義父の妹や弟たちが訪ねてくることも、よくありました。すると義父が、「夕ご飯を食べていけ」と誘うので、私は急きょ、おかずを工面して、手料理をふるまわなければなりません。料理にも、全然自信がないので、そんなときはびくびくものです。お味噌汁の味が美味しいと言われると、逆に、次も同じ味を作らなければならないと、緊張するありさまでした。

お土産にいただいた虎屋の羊羹を、人数分お茶菓子としてお出ししたら、羊羹は、厚く切るのが礼儀だ、切り方が薄いと注意されたこともあります。

また職人気質の義父は、気にいらないことがあると、つくった食事に手をつけず、バーンと席をけって、部屋に引きこもってしまうことも、たびたびありました。そんなときは、義父の部屋に謝りに行って、お説教をきかなければなりません。

少しでいいから、自分の自由な時間がほしい
そんな想いから、午後の２時から５時までの３時間、外出する口実ほしさに、税理士の勉強を始めた話は、拙著「７人家族の主婦で１日３時間しか使えなかった私が知識ゼロから難関資格に合格した方法」に、紹介しています。興味のある方は、ぜひご笑読ください！

やがて、祖父母が亡くなり、姉も妹も結婚して家を出ていきました。そして税理士試験に合格すると同時に、子供が生まれ、私は午後の空いた時間で、仕事をするようになりました。

するとそのうち、義父自身が再婚して、別に居を構えることになったのです。私は、子育てしながら、自分の仕事にまい進できるようになり、おかげさまで事務所もそれなりの規模になっていきました。

義父とまた一緒に住むことになったのは、８年前のことです。義父も再婚した義理の姑も、お互いに歳をとり、日々の生活が大変になってきたので、それぞれの子供と暮らしたいというのが、その理由です。

さあ、大変！

私はもはや、昔の私とは違います。従業員を30名近くかかえて、とても専業主婦には戻れません。私のように、バリバリ働く「ワーキング嫁」というのは、義父の世代にはとうてい理解できないだろうと考えた夫は、週末同居を提案してくれました。

つまり、平日は夫と義父が同居し、私と子供は別に暮らす。そして毎週末、私が義父たちの家に通うという「通い嫁」のスタイルです。

これは、とてもうまくいったと思います。平日は、義父の身の回りは、ヘルパーさんにお願いし、週末は私が食事をつくります。義父は、昔のように激高することもほとんどなくなり、私のつくった（上手ではない）料理を、なんでも美味しい、美味しいと言って、食べてくれました。とくにお肉が好物で、すき焼きやしゃぶしゃぶをつくると、誰よりもたくさんお肉をたいらげていたのも義父です。３人で外食したり、桜を見に行ったり、北海道に旅行に行ったこともあります。

平日の仕事中、義父から電話がかかってくることも、よくありました。要件は、本当に些細なことです。

通帳を記帳してほしいから、今夜取りにきてほしい。
→どうして、昨日会ったときに言ってくれないの～と思いながらも、分かった、分かったと答える私。

シャツのボタンが取れたから、今すぐつけに来てくれ。
→とりあえず、別のシャツを着てね。午後にヘルパーさんが来るから、ヘルパーさんにお願いして、とこれはさすがに、断りました。

大事にしていた、お気に入りの高価な日本画を、納戸からだして見せてくれたこともあります。「俺が死んだら、これはお前にやるから、もっていけよ」と言ってくれたのですが、私の他にそれを聞いていた人がいないので、果たしてもらえるかどうか…（笑）

気がつけば、本当に義父は私を頼りにしてくれていました。

そして亡くなる直前まで、元気に食事をし、身の回りのことも、なんでも一人でこなしていました。アパートをもっていたのですが、不動産会社に頼むこともなく、帳簿を自分でつけていました。確定申告に必要だから帳簿をちょうだいと言うと、今年は珍しく、「メンドくさくてよく分からないよ」と、言われました。「尚美、オマエ適当にやっててくれよ」

そんなわけにはいかないので、とにかく入金がわかるものと、領収書をちょうだい、と毎週のように言っても、今年にかぎってはなかなか用意してくれませんでした。「いつもみたいに、入金がわかるものをまとめてよ」と少し、強く言ったのは、倒れる２日前のことです。

一報をうけて病院に駆け付けた後、保険証を取りに義父の部屋に入ると、なんと、テーブルの上には、家賃収入や領収書などが１年分、きれいに並べられているではありませんか…。

最後まで、自分の始末はきっちり自分でつけて、義父はあっという間に旅立っていきました。本当に潔い、死にざまだったと思います。

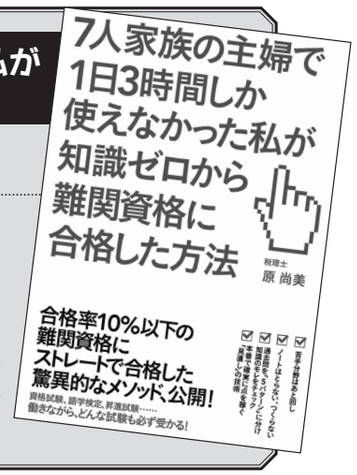
私は、いい嫁だったかな。ねえ、お義父さん…。

◆筆者 原 尚美（はら なおみ）プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練（現：全国公開模試）「財務諸表論」「法人税法」で全国1位の成績を収め、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性のスタッフ約30名の規模にまで成長。一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』（いずれもソーテック社）、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方（日本実業出版社）』『トコトンわかる株式会社のつくり方（新星出版社）』『世界一ラクにできる確定申告（技術評論社）』『一生食っていくための士業の営業術（中経出版）』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

好評発売中

7人家族の主婦で1日3時間しか使えなかった私が知識ゼロから難関資格に合格した方法

原 尚美 著（中経出版） 1,300円+税

アタマのいい人と勉強のできる人は違います。勉強のできる人は、点をとるコツを知っているだけなのです。どうすれば本番で実力以上の力を発揮して、難関試験に合格するための、超合理的な、大人の勉強法について書いたものです。
がんばっているのだけれど、なぜか結果のでない方、勉強したいのに、仕事が忙しくて時間がとれないビジネスパーソン、今よりひとつ上の人生を目指したくて、悩んでいる方、このまま家庭の中だけに埋もれてしまいたくない子育て中のママ、そんな皆さんへの応援の気持ちを込めた一冊です。